



【父なる神に抱かれて進む荒野の人生】

今日の聖書本文:申命記1章29-33節/ 暗唱聖句:申命記31章8節

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！先週一週間も主にあってお元気でしたか。みなさんの心はいかがでしたか。平安を保って歩むことができましたか。我らは新型コロナウイルスという全世界の感染症という不安と恐れ
の時代を歩んで、一年が経っているところであります。ワクチンが開発され、もう早ければ来月からワクチン接種も始まると聞いてますが、感染拡大はとまらず、また、緊急事態宣言の延長が一月延ばされているところであります。まったく、初めてのコロナ禍の歩みをしながら、まだまだ不安や自粛の続きで不便を感じたり、慣れない生活が続いています。その中で始まったこの2月、また今年をどう我らは歩み続け、進み行くべきでしょうか。

今日の本文は、ちょうど、イスラエルの民がまったく慣れない、不安で恐ろしい荒野で初めて歩んで一年が経ったごろの内容です。ある意味で、今日コロナ禍の中一年間歩んで来た我らにこれから、続く人生の歩みをどうするべきなのか、どう生きるべきか、どんな生き方を守るべきなのか、荒野での道を通らせて下さった神が、今我らにコロナ禍の道を進ませながら、どんな信仰と生き方を守って進むことを望んでおられるのかを共に神の御言葉を通して学んで行きたいと願っております。

<1. 手におえない不安と恐れ
の荒野での道>

今日の聖書の本文申命記の内容はイスラエルの民が紀元前1445年ごろ、エジプトでの430年間(出エジプト記12:40)の奴隷の悲惨な生活から解放され出エジプトしてから、荒野に入ってから最初1年ぐらいて経ていた時でした。その時モーセ(神様の預言者、イスラエルの指導者)が1年間の荒野の旅を振り返って見ながら神様の御前で告白した内容が今日の本文です。最初創世記によりますと、ヤコブと子供たち含め家族約70人でエジプトへ(創世記46:26-27、出エジプト記1章5節、申命記10:22)入りましたが、エジプトで400年間のうちに、20歳以上男性だけで、60万3550人(民数記1:46、民数記26章603、550人)で、女性や子どもも含めると、約200万—300万人の人数に急増していたイスラエルの民たち(出1章7-9節)は神様の約束の地に入るために、40年間荒野での大移動で通過しなければなりません。イスラエル民に祝福され豊かな肥沃な地が待っていましたが、しかし、そこに着く前に彼らが通らなければいけない砂漠のような荒野が待っていました。

約200万人のイスラエルの民族が大移動しながら、初めて経験する荒野で一年間の移動と生活の連続でした。

ずっとエジプトで430年間奴隷として、定着し、決まったことだけすれば十分じゃなくても食べること、飲むこと、寝ることに何の問題のない生活をして来たイスラエルの民にとって、荒野のところは、生まれてから初めて一年間歩んだことに慣れつつもなかなか慣れないところだったのではないのでしょうか。

イスラエルの民にとって荒野での環境は飲もうとしても十分な水の量もなく、食べようとしても食べる物もなく、かんかん照りつける荒野での暑いひざしの中、周りの環境はすべてが渴いた死の谷ばかりだったでしょう。モーセもこの荒野での一年間の歩みを振り返って見ながら、荒野の場所は“大きな恐ろしい荒野(申命記1:19)、燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわきき切った地(申命記8:15)、荒野で、獣のほえる荒地(申命記32:10)”だと表現したほど、実際荒野という場所、環境は、とても厳しく、イスラエルの民たちにとっては多くの不安と恐れが隠されていたはじめての体験のところだったのに間違いありません。

旧約聖書出エジプト記を読んで見ると、イスラエルの民は荒野での歩みと生活に疲れて、ピリピリとかなり感情的になり、今まで頼りになり、愛し尊敬して来た指導者モーセに、そして、ついに神様にまでつぶやき、避難し、恨みながら、攻撃している姿が生々しく記録されています。

出エジプト記15章を読んで見ると、荒野でイスラエルの民たちがモーセに何も飲むものがない！とつぶやいたり、次の16章には、荒野でパンと肉を食べれないことにイスラエル民たちがまたモーセにつぶやき叫んでいる姿が見えます。そして、17章にも飲める水がなくて渴いたイスラエルの民がモーセと激しく争いながら責めている姿があらわれます。動物もつぎつぎと倒れていたかも知れません。後段々疲れがたまり、理性を失った民たちはモーセについに向かって石投げで殺そうとする状況まで起こってしまった時もありました。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！荒野でのイスラエルの民たちはいかに大変だったのでしょうか。何も無い荒野で神様から恵みによって奇跡的に毎朝新鮮なパンのようなマナが、夕食には肉のため、うつらが与えられました。それも1年間のうちになれてしまったら、毎日同じメニューに飽きていたかも知れません。毎日いつも何日後テントをおりたたんだり、またテントをかけたり、不安定の生活の連続だったのでしょうか。一言でまとめると、イスラエルの民たちが経験した荒野での生活は今まで経験したことのないなかなか慣れない、非常に不安でつらい日々だったのに間違いありません。そんな荒野で大変な1年が経った時点のころ、疲れ果てて来たイスラエルの民たちは、本文32節を見ると、「まだあなたがたはあなたがたの神、主を信じていない。」の信仰を失った姿でした。しかし、一年間の荒野の歩みの中で神を信じる信仰を失っていたイスラエルの民たちに、モーセはこう証しています。「また荒野では、この場所に来るまでの全道中、あなたの神、主が、人が自分の子を抱くようにあなたを抱いてくださったのを、あなたがたは見ているのだ。（本文31節）」つまり、神が今日まで、ここまで1年間の荒野での生活を歩んで来ているうちに父なる神様の御胸に抱かれて通って来たのだ。と言われても信じられなかったのです。まるでモーセの話は大げさなことばのように、当てはまらない話のように、イスラエル民たちには同意しづらく、そんな神様の存在は受け入れ難い話だった思っていました。結局のところ、信仰の問題であり、信仰が大切に、鍵であることが分かります！

<2. 荒野でイスラエルの民と違って保って歩んだモーセの信仰>

実はモーセ自身はイスラエル民だれよりもはるかに苦勞をしながら、荒野で一緒にいたのではないのでしょうか。モーセは民たちよりもっと重い重荷おっていたでしょう。80歳の高齢で、2百万人のイスラエル民の責任をもっていた指導者の立場こそ、プレッシャーがひどく、常に胸を痛める位置だったではありませんか。

それにも関わらず、モーセは荒野の旅程(りよてい)をただ、苦難の行程(こうてい)として受け止めず、神様の御胸に抱かれて歩んで来た旅路として受け止めていたことが分かります。

コロナ禍が長期化し、今まで歩んでこたない初めての状況と環境の中我らは歩んで来ますが、みなさんは正直にいかがでしょうか。この初めての慣れない、厳しい大変なコロナ禍の荒野のような一年を過ごして来ながら、みなさんはモーセのように、もっと神に抱かれ、歩んで来た神に対する信仰が強くなった一年だったのでしょうか。それとも、神を信じていたつもりでしたが、荒野のような一年間の大変な歩みの中で、実際神の存在、神の御力、神に対する信仰が弱くなってしまっている方々はいらっしゃらないでしょうか。

コロナ禍の一年の歩んで来た我が国がこれから、もう一度、モーセのような信仰の見方、生き方、強い姿をしっかりと保ち、堅持し、歩み続けるために、どうして、モーセは同じ、いやもっと大変な荒野のような歩みの中でも一層信仰をしっかりと保ちながら、歩むことが可能だったのか、今日、我らもそれを学んで、見習っていきたくて願っています。

どうしてモーセの場合はイスラエルの民とは違った荒野での歩みと生き方を、人生の視覚と信仰を保つことができたのでしょうか。同じ大変な状況と同じ厳しい環境の荒野の現実を見ている、ただ目に見える現実の事だけではなく、モーセは目上げて、ひたすら見えない霊的に環境と状況を見分け、ひたすら見つめていたことが分かります。イスラエルの民は、今の目の前にある息詰(づ)まる荒野での厳しい現実の環境ばかりしか見つめてなかったため、むしろ、神を信じる信仰を失い、エジプトの奴隷の時より、もっと絶望的に陥られてものごとを考え、振る舞うことしかできなかったかも知れません。

反面、モーセは目には四方八方荒野の堅実の環境であっても、目に見るすべてに心が捕らわれず、信仰の霊的な目、信仰の目を上げて見えた全能なる神がおられ、その方が全てのイスラエル民の父のように、子どもである自分たちを抱き、今までも、そして、これからも共に歩んでくださる姿を続けて見つめて今日まで歩んで来たことが分かります。

イスラエル民たちは目に見える現実ばかりに、心捕らわれ見つめ進んで来たならば、反対にモーセは目を上げて、神の存在とその神様の御約束を握りつつ、ひたすらその方とつながれて、見上げて歩んで進んで来たことが分かります。これがまさにイスラエルの民たちとモーセの違いだったところではないでしょうか。

そしたら、具体的にモーセは一年間厳しい荒野での現実の中で、神様をどのような存在として、姿として、信じ、見上げ続けて来たのでしょうか。

①“先立って行かれる神(30節)”であった事をモーセは告白し信じています。(30節:あなたがたに先立って行かれるあなた

がたの神、主があなたがたのために 戦われる。エジプトで、あなたがたの目の前で、ためにして下さったのと同じように。)
イスラエルの民が荒野で先が見えなかったとき神様は“あなたがたが行くべき道を示されたのだ(33節:主はあなたがたが宿営する場所を探すために、道中あなたがたの先に立って行き、夜は火の中、昼は雲の中にあつて、あなたがたが行くべき道を示されるのだ。)”と、道のない荒野の旅程を主がここまで我らを導いてくださったことを認めています。みなさん!荒野には**実際道がありません**。砂漠のような荒野で東西南北(とうざいなんぼく)を見分ける事はとつてもできないことです。神様はそこで昼は雲の柱で日陰をつくってくださり、急速低温化される夜は火の柱であたたかく守ってくださり、さきが見えない荒野の道を導いてくださいました。イスラエルの民は事実、神による雲の柱と火の柱をとおして一年を過ぎ、今の場所にまで至らせてくれたのです。

道がなく、先が見えず、分からない荒野であってもモーセだけは不安に思われませんでした。なぜでしょうか。自分たちよりいつも先に立って行かれ、行くべき正しい道、最善の道に導いて下さる神をしっかりと信じ、頼りつつ、従う人生の歩みであることを覚え見上げていたからであります。後モーセが召される前にも、荒野での全行程を振り返って見た時、こう告白しています。

申命記31章8節を何方が読んで頂きますか。「主ご自身があなたに先立って進まれる。主があなたとともにおられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。」

「信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。(ヘブル人への手紙11章1節)」

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければなりません。(ヘブル人への手紙11章6節)」

我々が信じている神様はどんなお方ですか。我々を見放さないで、見捨てないで、ともにおられる神であります。しかし、ただ共におられるだけではなく、先が分からない荒野の道の中でご自身が先立ってご自分の民が日々行くべき最善の道に導かれ進ませ下さる神であります。コロナ禍が続いている中、その中であっても、始まったこの2月中にも、神が今もなお、我らとともにおられ、先が回らず、見えない、我らの人生の道をも先に進まれ、導かれる神である事を日々体験し忘れないで頂きたいと願います。

②“我らのために戦われる神”であると告白し信じています(30節以下)。

「あなたがたに先立っていかれるあなたがたの神、主があなたがたのために戦われる。エジプトで、あなたがたの目の前で、あなたがたの目の前で、あなたがたのためにして下さったのと同じように。」

イスラエルの民が今まで荒野を通して来ながら、彼らの代わりに戦ってくださったのは父なる神様であられることを忘れなかったのです。荒野ではみなさんもご存知のように、さまざまな戦いが潜在(せんざい)していて、決して安心出来ないところだったでしょう。たけだけしい猛獣や、毒の入っているサソリ、略奪するために戦って来る他民族の人々など、ゆっくり休む事も、安心して眠れることもできない所でした。そのようなけわしい環境において神様はいろんな意味で荒野でのあらゆる危険からイスラエルの民を守り、導いてくださったということです。「主があなたがたのために戦われるのだ。あなたがたは、ただ黙っていなさい。主はモーセに仰せられた。「なぜ、あなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエル子らに、前進するように言え。(出エジプト記(Exodus) 14章14-15節)」とされています。申命記3章22節「彼らを恐れてはならない。あなたがたのために戦われるのは、あなたがたの神、主であるからだ。」

③“子どもとして抱きしめて下さる父なる神”だと告白し信じています。

荒野で一年間生活をしてからモーセが経験した神様はどんなお方でしたか。今日の本文の31節をみてみてください。

「また荒野では、この場所に来るまでの全道中、あなたの神、主が、人(父)が自分の子を抱くようにあなたを抱いてくださった」自分たちだけでここまで来られたのではなく、父なる神に抱かれてここまで来られたという信仰でした。申命記32章10節「主は荒野の地で、荒涼(こうりょう)とした荒れ地で彼を見つけ、これを抱き、世話をし、ご自分の瞳(ひとみ)のように守られた。」

波乱万丈(はらんばんじょう)の歳月が流れて39年後、モーセが死の直前にした最後のメッセージに移って見ると、その時もモーセは40年間の荒野の中で変わりにもにおられ、戦い、与え、守り、導いて下さった神様を振り返って見ながら今まで弱気の我らを抱きしめて来られた神は我らの父なるお方であったと告白しています。“主はあなたを造った父ではないか(申命記32章6節)。”このようにモーセは荒野での最後の生涯まで神様は私たちの父であり、ご自分の子を抱き締めてくださる父として信じていたことが分かります。

みなさん、ご存知ですか。旧約聖書で神様を“父”として始めて呼んだ人はモーセでした。そのモーセは天に召される前までイスラエルの民に神様こそがあなたがたの慈しみ深い父だと強調しました。モーセはこの信仰に変わりありませんでした。荒野の生活1年目の時も、40年目の時もモーセにとって神様は“子供を愛し、抱きしめつつ、守り、共に歩んで下さった慈愛の父、頼れる我らの保護者”として変わりはありませんでした。そういうわけで同じく荒野の生活をしている中であっても、つぶやいている民を肯定的な方向に導く事ができたのです。

愛する信仰の家族のみなさん!コロナ禍の中でまた一年経って、新しい2月の道を歩んでいるみなさんは今いかがですか。今日私たちもまたこの新たな道のりも、この世の人生の旅路も荒野のように不安定で、あらゆる危険が潜んでいて一寸先(いっすんさき)も見えない道であるでしょう。私たちは神が約束してくださっているところに入るまでこの世の旅路をしなければならぬ旅人です。この旅路には涙と汗がしみこんでいます。つまらない時もあれば、孤独の時もあり、耐え難くつらい時もあるこの道がまさに荒野のような人生の旅路だと思います。

イギリスのオクスパードー大学のマックグレス教授が書いた[The Journey(旅路)]という本に心にひびく文章があったのでみなさんに紹介します。“人生って短くてさわやかなお散歩くらいだと思ったのに、きちんと準備もされてないままです。いつまでか分からず、走り続かなければならぬマラソン競争に変わってしまった。”

何もわからない若い時はまるで人生はお散歩のように気持ちよく自分の力と意志ですべてが順調になりそうです。しかしもうちょっと人生を歩んで見たら、準備のできないまままたえず回り競争しながら走り続かなければならぬマラソンのような人生であることによく気づくようになります。走り続ける中でどれだけ多くの人々が疲れ果ててあきらめてしまうかわかりません。多くの人々が絶望に陥ってしまいます。そして先が見えなくて不安になります。これがまさに私たちが歩んでいる荒野のような人生の旅路ではありませんか。

<3. 神を信じる我らはみな父なる神の子供です。>

今日の本文の31節をみてみてください。「あなたの神、主が、人(父)が自分の子を抱くようにあなたを抱いてくださったのを、あなたがたは見ているのだ。」出エジプト記15章2節「主は私の力、また、ほめ歌。主は私の救いとなられた。このかたこそ、私の神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」

愛するみなさん! 実際、私たちは旧約時代を生きていたモーセよりさらなる祝福を受けている事実を知っていますか。なぜなら神様が私たちを愛して下さる父となる事実をモーセが知っていたより私たちがもっとくわしく知っているからです。イエス様はこの世に来られて私たちにしてくださったことは何でしたか。イエスキリストが私たちのためにしてくださったことの一つは、神様が信じる全ての人々の父なる神であられる事を教えてくださった事でした。

そして神様がどんな方であるかを見ずから見せてくださいました。「わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハネ14章9節)」ですから、私たちが父なる神様を見たいなら、マタイの福音書からヨハネの福音書まで4つの福音書を開いてイエス様がなされたことと語られた事などを黙想すれば分かりやすいでしょう。

マタイの福音書7章11節、「あなたがたは、悪い者であっても、自分の子どもたちには良いものを与える事を知っているのです。それならなおのこと、天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがあるでしょうか。」ここで神様をだれだと言われているか。あなたがたの“父”だと言われています。

イエス様はこの世におられる間、日々神様にむかって“アバ、父”だと呼びながら生きました。

ヨハネの福音書17章はイエス様がこの世を離れる直前に弟子たちに告別の食事をされ、弟子たちのために祈られた内容が書かれています。ここでイエス様は神様を39回も“父”と呼びました。私たちがこのようなイエス様の姿をおして神様が私

の父となられることを教えられます。“(イエスキリスト)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。(ヨハネの福音書1章12節)”と主は言われました。これはつまり、神様が私たちの父となる‘神の子供としての特権’をくださったということです。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん! 忘れないでください。私たちはイエスを信じると同時に神様を父と呼ぶものになりました。「あなたがたは、人を再び恐怖に陥(おとし)れる、奴隷(どれい)の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは『アバ、父』と叫びます。(ローマ人への手紙8章15節)」

私たちがイエスキリストを受け入れ、神様を信じてから受けている恵みはどれだけ大きいでしょう。礼拝を始めながら私たちは使徒信条をもって信仰を告白する時、“我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず”その神様が私たちの父となることを日々告白できますようにお祈り申し上げます。イエス様が教えてくださった主の祈りを暗唱する時の“天にまします我らの父よ。”を我々は実際に告白することも出来ます。なぜなら、私たちは神様の子供とされる特権が与えられているからです。これこそすばらしい特権ではありませんか。

<結論: 始まった2月中にも父なる神様に抱かれ、共に日々歩んでいる事を是非忘れないで下さい!>

昨年的一年をまた送り、新たに歩もうと願うみなさん! みなさんはこの我らの父なる神をしっかりと信じ、頼りつつ、ひたすら見上げていますか。もう、こんにち我々の中でもこのように言う方もいるかも知れません。“私は父が抱いてくれたことは一度もない。親から愛していると聞いた事も一度もない。”それが今だに傷となって親を思い出すと旨が冷淡(れいたん)になることばかりの方もいるでしょう。今まで一度も親から抱かれた事がない親をどうしてあたたかく受け入れる事ができるのでしょうか。愛しているのだと一度も言ってくれなかった親からどうやって愛の父なる神を感じる事ができるのでしょうか。

しかし、愛するみなさん! 我らの父なる神はご自身の愛を通して、そんな歪み、曲がっている私たちを抱きしめながら癒そうと、回復しようとしておられます。そしてかならず変えてくださいます。聖霊の神は私たちをその傷から、乾いた生涯から出てくるようにと私たちを導いてくださいます。私たちを抱き締めてくださって、私たちもそのように愛を知り、分かち合う事のできる者になるよう助けてくださるのです。実際、私もそのような経験をしましたので今牧師としてみなさんの前で立つことができました。

愛するみなさん! 人間は抱いてあげると体と心ももっと元気になるということはすでに医科身体学会をとおして知られている事実です。これはただ私たちの肉体だけでしょうか。私たちの心も、たましいも同じく該当する原則です。だれがけわしいこの世で心の平安をもって生きるのでしょうか。だれがこの混雑している世のストレスから自由になれるのでしょうか。だれが恐れずに堂々と問題を克服していけるのでしょうか。それは父なる神様から抱かれることを経験しながら歩んでいる人々だと信じます。

聖書には多くの命令が出ていますが、そのなかで一番たくさんされている命令は“恐れるな”という命令です。今日申命記で大切な時、モーセはイスラエルの民に繰り返して“恐れないでいなさい”と命令しました。「本文29節: それで私はあなたがたに言った。「おののいてはならない。彼らを恐れてはならない。」

なぜでしょうか。神の子供は一人ではなく、神様の広い御むねに抱かれ、主と共に荒野のような人生を歩いている人だからです。一度自身についてこう話してみてください。“私は父なる神様に抱かれている人だ。私は神様から愛されている子供だ。! 我が魂よ、恐れるな。!”今日の神様は荒野のような人生の中で共に行って下さる我らの天の父なるお方であることがわかりました。

一年間、歩んだことのない荒野での歩みの中、日々必要な日用の糧を与えて下さる神の恵みと感謝を忘れなかったのです。ひもじかった時はマナをくださり、のどが渇いた時は岩から水を出させてくださいました。イスラエルの民が荒野で肉が食べたいと訴えたら肉をくださった日々食べられたり、長い旅程においても足がはれなかったことさえも、決して当たり前のことではなく、格別に主から与えられ、守られて来たことであることをモーセは忘れず、ずっと覚えていたのです。

モーセの信仰の告白には1年目の時も、40年を経た時も、いつも変わらず、全荒野での歩みと生活の中、いつもともにお

られ守り、先立行かれ、必要なすべてを与えて下さった神様をずっと見上げ続け、頼り続ていたことが分かります。
「申命記2章7節-事実、あなたの神、主は、あなたのしたすべてのことを祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守って下さったのだ。あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはなかった。」

「あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられたすべての道を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試(ため)し、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであった。それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの父祖(ふそ)たちも知らなかったマナを食べて下さった。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は主の御口から出るすべてのことばで生きるということ、あなたに分からせるためであった。この四十年の間、あなたの衣服(いふく)はすり切れず、あなたの足ははれなかった。」(申命記8章2-4節)
全ての神中心に信仰の目で見ているモーセは荒野の旅程を振り返って見た時、神の恵みと御力によって出エジプト後の1年間も、後40年間の全荒野での人生を歩んで来たのだと変わらず神を見上げながら証しています！

コロナが続いている中、特に緊急事態宣言が延長され、はじめて歩んでいる我らの人生の歩みの中、今年1年、今日の御言葉を通してさらにみなさんこうなると確信を持って言えます。お聞き下さい。そして、一年間是非心に刻んでおいてください。

今も我らの父なる神様がみなさんを抱きしめて下さっています。そして荒野のような人生の道のりの中、かならずみなさんを先立って導いてくださいます。そして、父なる神様がみなさんに必要なことを与え、生かされるように助けてくださいます。そして様々な戦いのある荒野のような生活の中で父なる神は抱きしめている我々のために戦って下さって勝利へ導きいれてくださいます。父なる神様が最後まで神の子ともたちを孤児のように見放さず、捨てず、我らみんながともに父なる神が約束されたところにまでかならず先立って我らが行くべき道に導いて下さると信じます。そしてついには永遠の御国、天国に着く時まで父なる神に抱かれて歩ませるようにして下さるでしょう。是非コロナ禍の荒野の状況の中でも、今も我らとともにおられるこの素晴らしい父なる神に抱かれて進み行く2月の日々となり、その父なる神を日々体験して進み行く全クリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族となりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン!